

二〇二四年度 入学試験問題

国 語

第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから十ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

① 次の「文章Ⅰ」「文章Ⅱ」は、どちらも西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』（二〇二〇年）の一節で、「明治一五〇年の日本の国の形成と変容」というテーマの、主に日本の近代化の過程について論じたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

5

10

15

20

25

30

35

40

45

50

55

60

★草莽……官職に就かず、民間に留まっている人のこと。「草深いところ」という意味で、幕藩体制が動揺する頃に、政治的主張をする民間知識人や脱藩浪士たちが自らを称して言った。

★よりしろ……神霊が寄り憑く対象物のこと。

★レジテイメイトする……合法化・正当化する、道理に合ったものにする、という意味。

★ホッブズ……イギリスの哲学者（一五八八～一六七九）。人間は自己保存のための自然権を持っているが、万人がそれを行使する（万人の万人に対する闘争）と、争いが絶えなくなり危険だから、自然権を放棄し主権者に委ねるとともに政治機構を作り、社会を安定させるという考え方。ここでは、人々の自由は国家に預け、国家が人々の自由を保障する、といった意味。

★ヘーゲル……ドイツの哲学者（一七七〇～一八三一）。

★主人と奴隷の弁証法……ヘーゲル哲学において最も多く論じられた主題の一つ。「主人」の生活は「奴隷」の労働に依存しているから、やがて「奴隷」は自立を果たし、「主人」は自立を喪失する。そのように両者の関係は入れ替わる。こうした過程を通じて人間の諸関係は形成され、改変されていくという論理のこと。

【文章Ⅱ】

130

125

120

115

110

105

100

165

160

155

150

145

140

135

(西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』)

★西周……………日本の啓蒙思想家(一八二九〜一八九七)。

★つとに……………早くから、以前から。

★柳父章……………翻訳語研究者・比較文化論研究者(一九二八〜二〇一八)。

★西田幾多郎……………日本の哲学者(一八七〇〜一九四五)。

★イ・ヨンスク……………社会言語学者(一九五六〜)。

★智識……………「知識」と同じ。

★ポルトガル人が初めて

日本に来たとき…一五四三年、ポルトガル人を乗せた中国船が種子島に漂着したことを指す。鉄砲(火縄銃)の技術が伝わった。

問一

——(1)「それまで宙吊りの権威にされていた天皇」とありますが、「天皇」が「それまで宙吊りの権威にされていた」とはどういうことですか。三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「近代国家の特徴とは、基本的には国民がベース、そしてその国民は原則的に対等だということ。そして、そういう条件を抱えて、それぞれの国は対外的には主権の相互承認秩序に従い、ひとつの国として振る舞います。」とありますが、このことを言い換えた説明として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 領土国家の基盤はそこに住んでいる人間である。国家の現実的な力は国王の代表者である国民が持つというフィクションを構築する。また、国家間同士の関係は、相互に定められたルールに基づいて契約を結ぶ。

イ 国家のベースは国民にある。従ってその国家に国王がいても国事の決定には何らかの形で国民が参加をする。この主権国家は、対外的には市場を舞台として展開される相互交渉の過程を経て国家間秩序の中に編成される。

ウ 国家とは主権国家のことである。それは一定の領土とその領土を一括統治する同じ一つの法権力の下にある国家のことで、主権者はその領民である国民となる。そして主権国家は、国際的な相互承認関係の中で成り立つ。

エ 国民国家は国家と市民社会の間に挿入されるフィクションを前提とする。その上で対等な立場の個人がそれぞれのルールに基づいた契約主体となる。このように、相互交渉の結果、多国間で国際的な承認が得られていく。

問三

——(3)「だから『社会』と言われても、そのまま society を写せるわけではない。」とありますが、その理由を説明したものとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「society」や「individual」や「contract」を日本語に置き換えることは、どうしても無理があるため、それまで日本に流通していた概念をうまく当てはめ、学問として成り立たせるしかなかったから。

イ 西洋語の「society」を一对一で日本語に翻訳する場合、「individual」や「contract」といった関連語があり、それらの影響により、「世の中」という理解をベースにして人々の間で考えられていくから。
ウ 漢学や蘭学の素養のあった人たちは、西洋の知識と言葉を持ち、大学で教えるようになるもの、「society」を「individual」や「contract」などの関連語と結びつけて考えることはできなかったから。

エ 日本の翻訳語は、ラテン語という共通のベースがないために、「society」の元の意味にまで遡ったり、「individual」や「contract」といった他の関連語と合わせて考えたりすることには限界があるから。

問四

——(4)「西洋の文物がすべて日本語の中に取り込まれて、誰もが『国語』のうちで全智識にあたることができるようになった。」とありますが、そうしたことはどのようなことによつて「できるようになった」のですか。文末を「…こと。」にして、三行以内で説明しなさい。

問五 ——(5)「ではなぜ、他のところではできなかったのに、日本では翻訳ができたのか。」とありますが、筆者はこれに対してどのように答えていますか。文末を「…から。」という形にして三行以内で説明しなさい。

問六

中からそれぞれ一つ選びなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ところが イ それに ウ あるいは エ だから

問七

——ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問八

国語の授業で、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を合わせて読み、意見を述べ合う活動がありました。先生の説明を聞いた後、発言したAさん～Dさんは誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

先生 本文の筆者は、西洋の思想や制度が本質的にどういふものかを丁寧(ていねい)に説明しつつ、その上で日本の近代化の中心がどういふ所にあつたのかをわかりやすく述べています。

特に筆者は、【文章Ⅰ】では西洋の政治制度の思想的な側面と、明治期の日本の政治的状況を述べ、【文章Ⅱ】では日本が近代化を果たした大きな要因は何だったのかを述べています。皆さんは、どういふ感想を持ちましたか。

ア Aさん 明治期の日本が西洋的な国家間秩序の中に関係づけられたという考え方は、例えば「日清戦争」「日露戦争」などの「戦争」といふ語に見られると思ひました。「応仁の乱」や「関ヶ原の戦い」のような「乱」や「戦・合戦」のイメージとは明らかに異なります。

イ Bさん 『解体新書』を例に、日本がすでに西洋の言葉も翻案転記できるようになつていたという見方は、当時の日本が置かれていた医学事情が大きいと思ひました。日本が急激に近代化し、やがて戦争に敗れていく背景には、江戸時代の医学事情の変化もあつたのでしよう。

ウ Cさん ポルトガル人が初めて日本に来た時、日本人は彼らのことを克明(くめい)に描き出す力があつたという捉え方に大変興味を持ちました。例えば、彼らの持つていた見慣れぬ火器に興味を持ち、製法を学び、自分たちで鉄砲を作れるようになったといふことがそれにあたります。

エ Dさん 幕末の頃に最も流布したのが『万国公法』というアメリカの国際法の教科書だつたといふ筆者の指摘は、他者との関係性を理解しようとする日本の姿勢を語つていてと思ひました。日本はこのおよそ千年前に、中国(唐)に学び、関係性を理解しようとしていましたから。

2 次の文章は、青山美智子『月の立つ林で』の一節です。

これまでの主なあらすじ
これを読んだ後、本文を読んで後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

北島（旧姓南沢）睦子は食品メーカーに勤めていたが、三年前に二十五歳で同僚（剛志）と結婚して会社を辞める。もともとアクセサリー作りが趣味の睦子は、作ったものを友人にプレゼントしたり、フリーマーケットで販売したりするのが好きだった。やがて睦子は週に三日ほどのパートタイムの仕事をしなが、ゆとりができたときには、ハンドメイド通販サイト「ラスト」に「mina」というブランド名で出店するようになる。三カ月ほど経ったとき、急に注文が殺到し始め、大きな会場を使ったハンドメイドのイベントや展示販売にも声がかかるほどになった。睦子の作品は勢いに乗っていた。

5

10

15

20

25

30

35

40

45

50

80

75

70

65

60

55

115

110

105

100

95

90

85

150

145

140

135

130

125

120

180

175

170

165

160

155

(青山美智子『月の立つ林で』)

★『地球の出』……………アポロ8号ミッション中の一九六八年、宇宙飛行士ウィリアム・アンダーズが撮影した地球の写真のこと。「史上最も影響力のあった環境写真」として知られている。

問一 (一) I に入れる漢字一字を書きなさい。

(二) II には、「あつてもしかたがないものや、よけいなつけ足し。」という意味の言葉が入ります。漢字二字、またはひらがな三字で書きなさい。

(三) III には、体の部分を表す言葉が入り、「いやそうな顔をした。」(II) III をひそめた」という意味の慣用句になります。漢字一字、またはひらがな二字で書きなさい。

問二 —— (1) 「なかなか、言うことが深い。」とありますが、「タケトリ・オキナ」はどういうことを言ったのですか。三行以内で説明しなさい。

問三 —— a 「屈託なく」・b 「取り繕った」の意味としてふさわしいものを、それぞれア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 「屈託なく」

ア わだかまりがとけることもなく

イ 何かを気にしたりすることなく

ウ もどかしくてはがゆい心もなく

エ 思いや考え方を変えることなく

b 「取り繕った」

ア その時だけなんとかうまくごまかした

イ 努力してわざとそのように形づくった

ウ きらわれないように配慮の行き届いた

エ 相手の気持ちをよい方向にみちびいた

問四 —— (2) 「私は急に開けてきた新しい世界に胸をときめかせながら」とありますが、このときの「私」の心情を三行以内で説明しなさい。

問五 —— (3) 「こんなみつともない自分」とありますが、この場面では、どういうことが「みつともない」のですか。三行以内で説明しなさい。

問六 —— (4) 「私はその夢を人々にささげよう。」とありますが、ここでの「私」の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かりに才能や夫がいる生活があったとしても、世の中を生きる上では不必要なことだから、全てを人々と共有しようと強く決意する気持ち。

イ たとえ夫婦生活がうまくいかなかったとしても、人々に喜びを^{あた}与えるアクセサリー作家として高みを目指していこうと強く決意する気持ち。

ウ もしも剛志と分かり合えることがあるならば、今までの生活を割り切り、^{じゆんぷうまんぱん}順風満帆で理想的な夫婦関係を演じるだけだと強く決意する気持ち。

エ 万一、自分のアクセサリー作品が人々から愛されなくなったとしても、夢を与え続ける作家として生涯を送っていこうと強く決意する気持ち。

問七

(5) に入れる八字の表現を本文から抜き出して答えなさい。

問八

(一) A に入れる語として最もふさわしいものを次のア～オの中か

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア するすると イ ずるずると ウ ゆるゆると

エ のろのろと オ きらきらと

(二) 次の表現の B D に入れる語として最もふさわしいもの

のを、《語群》の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

・彼はいつも威張っているのに、自分より偉い人の前では B

頭を下げている。

・彼女は不満に思うことがあるらしく、いつまでも C と文句

を言っていた。

・悲しい小説を読んで、涙が D と落ちてきて本がすっかり濡

れてしまった。

《語群》

ア ぶらぶら イ すらすら ウ ぐずぐず エ ぺこぺこ

オ はらはら カ むかむか キ よろよろ ク さらさら

問九

本文の表現の特徴や効果を説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア インスタグラムの DM から始まった編集者篠宮さんとのやりとりの描写は、メールの最後に付けられたポッドキャストの番組によつて、その後のプロセスがスムーズに運ばれていくことを予感させるものとなっている。

イ 細かい字をたどっているせいで目の乾きに悩まされる「私」が、やや強い刺激のある目薬を買い、点眼して潤いを与えようとする箇所からは、アクセサリー作りがあまりはかどっていないことが暗示される。

ウ 夫剛志と口論になる場面では、「羽根のようにふわふわと舞い上がっていた心」、「重く沈んでいく」という比喩が用いられており、それによつてせつば詰まってお互いに感情的になつてしまう状況が鮮明になっている。

エ 物語内に挿入される「タケトリ・オキナ」の語りは、美しい地球の表の部分と裏の部分を考えさせるもので、華々しい世界に憧れつつ、身近なところでは辛い思いをしている「私」の生き方を象徴している。

問十

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 篠宮さんとのやりとりの後、帰宅した「私」は、本の出版の話ですれば夫剛志も自分の仕事に興味を持ってくれるかもしれないと期待していた。

イ 帰宅した後「私」は、久しぶりに手の込んだ煮込み料理を作ったが、それは夫からせめて「おめでどう」の一言を言つてほしかったからである。

ウ 「私」が本の出版の話をしたとき、夫剛志は少し驚いて興味を示したので、畳みかけるように語り、急がなければならぬ事情を強く訴えた。

エ 夫に傲慢な態度をとってしまった「私」は反省するとともに、せめて自分を讃えてくれさえすれば、謙虚になることができるのと夫に伝えた。

